

2020 年度多摩美術大学校友会奨学金 選考評**通木 菜々絵** 美術学部 絵画学科 日本画専攻 4年

花の花弁をこの2、3年描き続けている。時には花の集合体、時にはバラバラに空に浮遊したものを表現してきた。発想に頼りがちな現代において毎日こつこつと制作している姿は、まるで修行僧の様であり、まわりの生徒にも大きな影響を与えてきた。絵かきの原点を教えてくれる彼女には期待する事が多い。

豊田 光 美術学部 絵画学科 日本画専攻 4年

グローバル化の中で育った日本画家は何を自分のルーツとしていくのだろうか。豊田さんは慣れ親しんだマンガやアニメーションの要素を画面に入れ込む。さらにグラフィティや江戸時代の絵画なども取り入れ混沌とした画面を作り上げる。「人の持つ両極性」(豊田)という言葉は現代を生きる我々全員にあてはまる。日本画を専攻していても西洋由来の文化の中で生活し、デジタル化の進む社会では日本の伝統絵画も現代美術もフラットで等価値だ。フラットといえばコラージュ技法は伝統的な日本画の持つ平面性とも連動してそれも取り込む。このように豊田さんの絵画は混沌とした現代日本をすぐれて象徴的に表している。

柳田 佳子 大学院美術研究科 修士課程 絵画専攻 日本画 1年

誠実な表現は作者の内面を表している様に思える。熱心な制作を続けてきた彼女は、身近な人物や静物を描く事で、より確かな「人間」というものの本質を探ろうとしてきたと言える。今回の校友会の選抜は、彼女にとって大きな勇気を与える事になった。今後の活躍を心から願っている。

園田 将久 美術学部 絵画学科 油画専攻 4年

日常に当たり前にあるものたちに、それまでと違った解釈を与えることは美術の持つひとつの役割だろう。壁に埋まったような巨大なイスは、脳が使っているルールと想定からはみ出し、認知作用を刺激するおもしろい作品だ。またアパートで造ったという部屋全体を斜めにした作品は、日常を日常に見せながら非日常に作り替えたもので、そこに行って体験したくなるような興味深い作品である。コロナ下で行動が制限される中、アパートに籠ることを前提に最大限の作品を造ろうとする姿勢も評価したい。

山口 彩紀 美術学部 絵画学科 油画専攻 4年

山口さんの絵画を見たとき、明治時代の絵画のような印象を持った。丹念に描き込まれた静物画は、今ではあまり見かけない実物を見てじっくりものと対峙する真摯な姿勢を感じさせた。作品の意図も作り込まれた物語や仕掛けを極力排除し、描くことの力で絵画を見せようとしている。明治時代の絵画とは古くさいという意味ではなく、必死になって本質を捉えよう、学んでいこうとする姿勢を持っているという意味だ。今描かれている絵画はどんな形式でも現代の絵画である。さまざまな問題意識があって良い。

楊 浩 大学院美術研究科 修士課程 絵画専攻 版画 1年

古い雑誌や新聞などの紙を使用して漉き返し、元とは姿の異なる紙に新しく再生することで、過去の時間と現在の時間を交差させて様々な時代や歴史と繋げようと制作を行っている。それは、時間という概念の中に隠されている見えないものをあぶりだそうとしているのだろう。柔い紙の風合いを見つめていると、作品を軸としながら様々な時間が合流し、再びそれぞれの方向へ流れていくような、そんな感覚を呼び起こす作品である。

福田 大晃 美術学部 彫刻学科 2年

彫刻というメディアを扱う際にデジタルを扱うことは昔からなされていたが、コンシューマー向けの機材が増え始めたこともあり、敷居が低くなってきたことは確かだ。3D データさえあれば出力や大量の複製、素材転換が容易に行えることもあり、彫刻という概念がより複雑化している現在、新たな彫刻感というものを打ち出せるタイミングでもある。今でしか出来ない彫刻というものを意識して今後の制作に挑んでもらいたい。

百崎 優花 大学院美術研究科 修士課程 工芸専攻 陶 1年

これまでの研究活動の軌跡やこれからの研究計画の内容を、画像や図面と文章で順序立てて説明されていて本人の研究計画の準備がよく見てとれました。卒業制作から新たに見つけ出した事柄を整理し、より自分の表現に近づける方法を模索し展開していこうとする様子が伝わってきます。本人の「デジタル的で無機質な行為と、アナログ的で有機的な行為を組み合わせることでできた揺らぎこそが手と陶と言う素材でしかできない表現」がさらに楽しみです。

高橋 美帆 美術学部 グラフィックデザイン学科 4年

日常の中から自分が感じ心に留まった事柄を丁寧に掘り起こしてユニークなテーマにまとめ上げていると感じています。切り紙手法を参考にしたアニメーションは、モチーフの独特な動きや様々な色の変化に加え奥行きを感じさせる表現など独特で、見ている者が画面の中に入り込んでいってしまう程見入ってしまいました。怪しげで美しい画面は非常に魅力があると感じます。本人の思考と膨大な制作手順や作業内容がしっかりと結びついた内容だと感じます。今後の研究が楽しみです。

花岡 和羽 美術学部 生産デザイン学科 テキスタイルデザイン専攻 4年

あらゆる情報が操作されている現代に置いて「本当のこと」を知りたいと願うこと、それを行う手段として様々な事柄と向き合うということをテーマに制作をしている。歴史的にテキスタイルの文脈はレイバーワークの側面もあり、手法自体が社会性を帯びた表現である。自身が感じた社会問題に対して時間をかけて、真摯に事実と向き合うために素材を織り込んでいく姿勢を評価したい。

イ ヘリム 大学院美術研究科 修士課程 デザイン専攻 テキスタイルデザイン 2年

伝統的な技法である木版画とデジタルプリントとを重ねることで、現代社会から生まれる様々な「痛み」を表現している。木版画の表情は、自然の有機物である木材を使用するため、僅かな条件の違いでその様相を変化させてしまうが、デジタルプリントは、比類のない均一性と再現性に優れている。それは同じ印刷技法でも真逆の表現方法といえよう。この2つの技法を併用することが、この時代の人々が抱える心の問題を包括した、新しい表現へと繋げているようだ。

伊藤 健太 大学院美術研究科 修士課程 デザイン専攻 グラフィックデザイン 1年

他大学で環境デザインと建築を学んだ後に本学の大学院グラフィックデザイン領域に進学したという経歴から、現在の環境グラフィックスからさらに視点の幅を広げ、柔軟な発想で取り組んでいる。誰かの意図で描かれた一般的にデザインと呼ばれているものだけでなく、身近な環境に潜む様々なものとその読み取られ方の調査研究を通して、この分野でデザイナーは何を為すべきかを探そうとしている。領域を超えた意欲的なテーマであり今後の展開が期待される。

倉本 大豪 大学院美術研究科 修士課程 デザイン専攻 グラフィックデザイン 1年

至極真摯な問題意識で作品制作を続けている。「記憶の可視化による東日本大震災の伝承」というテーマは力強いメッセージである。震災に関わる意識調査やフィルム写真で記憶を探求する姿勢もぬかりがない。作品概要の内容が既視感があるのが心配だが、過去作品の「8月6日、ヒロシマ。」や「Phantom」はオリジナリティがあり魅力的な作品群だ。その作者の斬新な表現力で作品が完成することを期待している。

池部 ヒロト 美術学部 生産デザイン学科 テキスタイルデザイン専攻 2年

ファストファッションが全盛の中、全く対極の表現力が評価の対象となった。天然素材や古来の製法・手法の持つ創作的な美意識の凄まじさに触れ合え、新鮮な感動があった。それは、ファッションという枠を超えて、舞台衣裳やアート表現の領域にまで可能性を広げる創造的な作品である。特に舞台衣裳として魅力的な要素があり、これからの創作活動にも取り入れて頂きたい。新しい表現を開拓した時、それをベースとした創造の広がりや繋がりは無限の可能性を内包している。

汪 駿 大学院美術研究科 博士課程 1年

理論研究と創作研究の両輪による「光のビジュアル表現における精神性の研究」をテーマとする計画は大変興味深い。汪駿さんがこれまで光の表現の可能性を探求してきた研究活動であるポスター作品群からも、この研究計画に挑むことができる高い意欲と力量を見ることができる。光の視覚表現と3DCGをはじめとする表現技法との関連性によっての、情感に注目したビジュアルコミュニケーションの実験に取り組む、汪駿さんならではの研究成果に期待している。